

俺が管理してやる ～  
消防署でカントがバレ  
た新人消防士の話～

「はっ……あ……っ♡」

シャワーの湯が肩を打つ。蒸気が個室を白く染める。膝が震えていた。

——鬼塚さんに、見られた。

壁のパイプに手首を引っ掛けられて、頭の上で固定されて、股間を覆っていた両手を剥がされて。蒸気越しに鬼塚さんの視線がそこに落ちた瞬間、全身の血が凍った。

「——やっぱりな」

その声が、まだ耳にこびりついている。

「ッ……♡」

シャワーの湯が股の間を流れていく。さっきまで鬼塚さんの指があった場所を、熱い湯が撫でるだけで身体がびくりと反応する。

——三十分前のことだ。

居残り訓練が終わって、他の隊員が全員引き上げた夕方。

シャワー室の個室に入ったのは、鬼塚さんが外で待っているはずだったからだ。コンプレッションショーツを二枚重ねで脱いで、ようやく解放された身体にシャワーを浴びせて

——  
ドアが開いた。

「鬼塚さんっ!? ちょ、今——」

蒸気の向こうに立っていた。上半身裸。日焼けした肌に水滴が光り、分厚い胸板が視界を塞ぐ。ハーフパンツ一枚の鬼塚さんが、個室シャワーの入口を完全に塞いでいた。

「身体検査だって言っただろ。シャワー室でやった方が効率いい」

「っ……出てください……っ」

咄嗟に股間を両手で隠した。でも鬼塚さんの目は——もうそこに向いていた。

「何を隠してんだ、桐生」

一歩。狭い個室にあの体格が踏み込んでくる。タイルの壁に背中がぶつかった。逃げ場がない。

「隠すってことは、隠すもんがあるってことだろ」

太い手首が伸びてきた。片手で——レスキュー隊九年の腕力で——僕の両手首をまとめて掴み、頭の上に持ち上げる。壁のパイプに手首を引っ掛けるようにして固定された。

股間が——露わになる。

「……やっぱりな」

蒸気越しても分かった。鬼塚さんの目が変わる。

「最初の顔合わせん時から違和感あったんだよ」

声は落ち着いていた。確認作業をしている声だった。——最初から知っていた人間の声。

「コンプレッション二枚重ね、股間を庇う動き、更衣室で最後まで残る癖。消防学校の健康診断の記録にも性別欄に注記があった。調べりゃ分かる」

膝ががくがくと笑い出す。消防学校でも誰にもバレなかった。書類操作も個別対応も完璧だったはずなのに——。

「カントボーイだろ、お前」

「っ……♡」

（違う。違わないけど——認めたくない。認めたら、もう——）

声が出なかった。否定も、肯定も。ただ蒸気の中で裸のまま、手首を頭上に拘束されて、鬼塚さんの前に晒されている。

「お前みたいな身体で現場に出たらどうなるか分かるか」

空いた方の手が伸びてきた。太腿の内側に触れる。消防士の手だ。分厚くて硬くて、タコだらけの指先が、僕の柔らかい肌の上をざりっと滑る。

「火事場でぶっ倒れて、救急が服脱がせた時にバレる。お前だけじゃない、署全体の問題になる」

「だ、だから何だって——」

「だから俺が管理する」

指が——太腿の内側を滑り上がっていく。

「お前の身体の状態を、俺がちゃんと把握しておく」

「っ、触んな……っ♡♡」

鬼塚さんの指が、股に触れた。

ざらついた指先が、割れ目の縁をそっとなぞる。シャワーの湯が流れる中で、その指の感触だけが異質に——生々しく——伝わってくる。

「あ……っ♡」

声が漏れた。自分で驚く。

（な、なんで——声なんか——っ♡♡）

「検査だ。現場で倒れた時にパニック起こさねえように、今のうちに慣らしとく」

「っ、検査って……そんなの……っ♡」

鬼塚さんの中指が、割れ目に沿ってゆっくりと上下する。硬い指の腹が柔らかい肉をなぞるたび、ざりっとした刺激が走って、脚の付け根がびくびくと痙攣する。

「力抜けよ。太腿ガチガチだぞ」

「っ、だって……っ♡♡」

「さっき担架の上でもこうだったろ。股関節が硬すぎる。これじゃ開脚系の救助動作に支障が出る」

もっともらしい。もっともらしいのに——鬼塚さんの指はぜんぜん「検査」じゃない。割れ目の上を行ったり来たりして、シャワーの湯と混ざった何かを指先に絡めている。

「おい、ここ」

「っ♡♡」

「もう濡れてんぞ。シャワーの湯じゃねえよな、この粘度」  
(——バレてる。身体が勝手に反応してるのが、全部——)

「ひ……っ、やめ……っ♡♡」

「何がやめた。お前の身体が正直なんだよ」

鬼塚さんの親指が——クリトリスに触れた。

「んっ——う♡♡」

硬い指の腹で、ぐり、と押し込まれる。シャワーの湯を弾いて、じかにそこを圧迫される感覚に、目の前がちかちかと明滅した。

(だめ……っ♡ そこ……男なのに、僕は男なのに、こんなところ触られて——)

「ッ——あ……っ♡♡ やめて……っ♡♡」

口を押さえようとする。でも手首はパイプに固定されたまま。声を殺す術がない。

「へえ……感じるんだ、ここ」

実験するみたいに、鬼塚さんがクリトリスの角度を変えて押す。上から。横から。皮を指先でめくり上げて、露出した先端を——タコのある親指の縁で、かりかりと引っ掻いた。

「ひあっ——♡♡ ッ♡ やめっ、そこ、直接は——っ♡♡」

(かんじる——感じてる——こんな粗い指に、こんなところ掻かれて——♡♡)

「やめてほしかったら、自分で対処法を身につけろ。現場で男に触られた時にこんな反応してたら一発でバレるぞ」

「っ♡♡ そんな、こと——んっ♡♡」

かり。かり。かりかり♡

鬼塚さんの指先がクリトリスの先端を執拗に搔く。ざらざらした指のタコが粘膜を擦るたびに、足指がタイルの上でぎゅっと丸まる。

「——中も確認する」

「ッ♡♡ な——」

鬼塚さんの中指が、割れ目の奥に沈んだ。

入口を押し開くように——ずぶ、と。

「お……っっ♡♡♡」

声が裏返った。鬼塚さんの指は消防士のそれだ。節くれ立って太い。他人の指が自分の中に入ってくる感覚——異物感と、それを上回る熱さが——頭の奥を灼いた。

（入って——入ってる——鬼塚さんの指が、僕の、おまんこの——）

「ッ……やだ……っ♡♡ 抜いて……っ♡♡」

「検査の途中だ。奥にどのくらい深さがあるか確認する」

「そんなの、検査じゃ——おう……っ♡♡」

太い指が中をかき回す。繊細さのかけらもない。人を担架ごと持ち上げる手だ。その指先が、初めて他人に触れられるおまんこの中を——粘膜を——遠慮なく探る。

ずちゅ。

蒸気に反響して、タイル張りのシャワー室に卑猥な水音が響いた。

「び……っ♡♡ う、やだ……音……っ♡♡」

「お前のまんこが鳴らしてんだよ。俺のせいにすんな」

（ちがう——僕の身体が勝手に——♡♡）

認めたくない。男として消防学校を首席で出た。体力測定も上位で通過した。なのに今、先輩の指一本で膝が笑って、おまんこから音を鳴らしている。

二本目が入った。

「あっ……♡♡ ふ……っ♡♡ 二本、は——っ♡♡」

ずちゅ、ずちゅ、と水音の密度が上がる。鬼塚さんの中指と薬指が並んで中に沈んでいる。入口が押し広げられる圧迫感。壁を引き延ばされる感覚。

「中も締め方がいいな。消防学校で鍛えた体幹のおかげか？ 中の筋肉まで発達してやがる」

「っ♡♡ そんなとこ、褒められても——んっ♡♡」

（嬉しくない。嬉しくないのに——おまんこが、鬼塚さんの指に——きゅって——♡♡）



内壁が勝手に指を締めた。蒸気越しに、鬼塚さんの口の端が上がるのが見えた。

「奥を探る。動くなよ」

「お……っ♡♡ や、奥はっ——ひう♡♡」

長い指が、中の一番深いところを探る。ごつごつした指先が——ある壁に触れた。

「——ここか」

子宮口。

こつん、と先端が触れた瞬間、僕の腰が跳ね上がった。

「っひお——♡♡♡ だめ、そこ——っ♡♡ そこだけは——っ♡♡♡」

「子宮まであるのか。……完全に女の構造じゃねえか」

（言わないで——っ♡♡ 分かってる、自分の身体のことくらい——でもそうやってはっきり口にされたら——♡♡♡）

涙が滲んだ。悔しさなのか羞恥なのか、自分でも分からない。

鬼塚さんの指が、子宮口をこつこつと叩き始める。

「やだっ……♡♡ そこ突かないでっ♡♡ おかしくなるっ♡♡」

「おかしくなるほど感じてんのか。子宮口の感度も高いな」

「ちが——お、おお……っ♡♡♡」

膝が碎けた。鬼塚さんの腕だけで支えられて、壁とシャワーの蒸気の中でずるずると崩れていく。脚の間から、シャワーの湯に混じって——明らかに湯とは違う、ぬるりとした液体がこぼれ落ちた。

「ほら見ろ。お前のまんこ、もう俺の指の形覚えてきてんぞ。奥から愛液が止まんねえじゃねえか」

「やだ……っ♡♡ やだぁ……っ♡♡」

ぬるぬると——二本の指がずちゅずちゅと音を立てて出入りする。鬼塚さんの手が、僕のおまんこを完全に掌握している。

「っ——お♡♡ おっ♡♡ おお……っ♡♡♡」

指を曲げられた。中でぐりっとGスポットを搔き上げられて、同時に親指がクリトリスに乗る。

「おっ——♡♡♡ っそこ、同時は——っ♡♡♡」

「中と外、同時にやった方が効率いいだろ」

ごりごりとGスポットを擦り上げながら、クリトリスを親指の腹で潰すように回す。

(だめ——だめだめだめ——イ——っ♡♡ こんな——鬼塚さんの指なんかで——♡♡♡)

「お——おお——びっ——♡♡♡♡」